

# 台湾が与那国に求めるもの



井潤裕

花蓮市のホテルから市街地の遠景

(昨年9月、僕は沖縄県与那国町と台湾花蓮市の友好姉妹都市提携30周年記念事業にオブザーバーとして参加させてもらった。本稿はその参加記録である。本来なら、遅くとも昨年10月くらいに、ちゃっちゃかとスケジュールと感想を書いてしまえばいいのだが、今回はどうしても腑に落ちなかったことがあって、書こうにも書けなかったのだ。それで、関係諸氏にはまず無聊をお詫びしたいと思う。)

## はじめに

日本には稚内・根室・対馬・与那国という4つの国境がある。・・・などを書いておきながら何だが、この物言いには問題点が2つある。第一に、日本は島国なのだから、海の向こうには必ず外国があるというか、すべての海岸は外国とつながっている。だから、国境はこの4つだけではなく、五島列島も小笠原も、佐渡も犬吠埼も横浜ももちろん国境といえるのだ。ただ、ここでは、比較的近い距離で相手と対峙した狭義の国境、国外との接点を意味していると理解されたい。

第二の問題は、上にあげた4つのうち、本当に国境と呼べるのは1つだけ、ということだ。厳密な意味での国境は対馬だけである。根室と稚内と向かい合っているのはロシアのはずだが、周知のように、根室の先にあるものは北方領土であり、ここはあくまでも不法占拠されている「日本の領土」(というのが日本の主張)であり、ゆえに根室と国後との間にある線は国境ではなく、中間ラインである。稚内の北にはサハリンがある。ここは日本が領有主張を放棄した土地であるため、すでに日本領ではないものの、ソ連がサンフランシスコ平和条約に調印しなかったという事情から、どこも領有権のない空地である(・・・というのが日本の立場だ)。だから、宗谷海峡も国境とはいえない。そして、日本最西端・与那国島の向こうには台湾がある。ここには諍いが存在しないものの、その相手は「地域」であって国ではない。だから、ここも厳密には国境とはいえない。相手が国だろうが地域だろうが大した問題ではない・・・のかもしれないが、現実には、思っていた以上にその違いは大きいものであった。

2012年の秋に、僕はこの「4つの国境」すべてを横断するという機会に恵まれた。これは非常に珍しい経験といえるだろう。北方領土へはいわゆる四島交流事業に参加しなければ行けないし、与那国と台湾の間にも、そもそも定期航路がないからだ。

周知のように、2012年もさまざまな意味で日本の国境で問題が噴出した。今年もまた、レーダー照射とか核実験とか何かと喧しい（と揶揄してはいけないが）。けれども、一方で日本では国境問題＝領土問題という短絡的な考えがあまりも蔓延してはいないだろうか。確かに尖閣も竹島も大きな問題ではあろうが、実際に国境に出向いてみると、現地には実にさまざまな困難や課題があるにもかかわらず、それは全然問題にもされていない。4つの国境に足を運んだことで改めて痛感したのは、「結局、日本にはまともなボーダーポリティクスないしはボーダーセキュリティというものがない」という事実である。

すなわち、日本の国境はどうあるべきか、どうしなくてはいけないのか——今もなお、国境を扱う書籍は刊行され続けてはいても、そこで語られることは、ほとんどが領土画定問題にまつわる喧々諤々である。例えば、いま与那国をはじめとするボーダーエリアがどんな状況にあるか、それがいかなる意味をもつのかをきちんと説明し、尖閣や八重山も含めた日本の南西部国境地帯がどうあるべきなのか、というところまで論じているものは少ない。要するに「そんなことを書いたところで売れないから」だろう。北方領土や尖閣がどうなるかに関心を持つ人は多くても、根室や与那国がどうなるかに関心を持つ人は圧倒的に少ない。困ったことに、人々が寄せる国境への関心と無関心はいつも両極端だ。危ういところには異様なまでに敏感であるくせに、そうでないところには無慈悲なまでに冷淡だ。率直に言って、4つの国境をめぐる2012年の旅の中で、「ボーダーポリティクスの不在」に対する焦燥感あるいは危うさを強烈に感じたのは、稚内や根室ではなく、むしろ与那国だった。

ともあれ、はじめよう。

## 1. とりあえず与那国へ（～2012年9月19日）

与那国島は日本最西端の島で、台湾と「国境」を接している。東には石垣島だが、距離としてはむしろ台湾の方がやや近いくらいだ。テレビドラマ「Dr.コトー診療所」の舞台となり、そのロケ地は島の観光スポットにもなっている。島は与那国町という自治体でもあり、祖納(そない)・久部良(くぶら)・比川という3つの集落からなる。現在の人口はおよそ1600人で、強力な地場産業もなく「離島・過疎・国境」という三重苦にあえいでいるのが実情だ。

ヒトの健康状態が時にお肌や顔色にあらわれるように、国家の健康は辺境に見てとれる——そんな思いを抱きながら与那国を訪れたとき、「ああ、やっぱり日本は健康だ。まだまだ大丈夫だ」と思える人はたぶん一人もいないだろう。そのくらい、与那国の衰弱は歴然としている。

その与那国町は、1982年から台湾・花蓮市と友好姉妹都市提携を結んでいる。2012年はちょうど提携30周年にあたるため、その記念事業として与那国から花蓮への訪問団が結成された。しかし、両者の間には定期便はない。だから、復興航空のチャーター便が用意された。与那国町としては、台湾との交流を通じて三重苦にあえぐ島の実情を少しでも改善したいという切実なる思いがある。ただ、30年間の経過を通じて、それが一筋縄ではいかない事実もよく知っている。

その前年の2011年5月にも、チャーター便が飛んだ。その時の模様は別に報告があるので割愛する。これは、実にさまざまな関係諸氏の努力の賜物であったし、台湾で待っていたのは熱烈とっていい歓迎セレモニーであった。僕はこの時もひとりの参加者としてその場にいた。だが、正直に言って、その熱烈ぶりは異様に思えた。台湾と与那国の間にたゆたうもの、得体の知れない期待と不安。その異様さの正体を理解できぬまま、2011年のイベントは終幕を迎えてしまい、僕はいささか消化不良のままで台湾を後にしたのだ。

そして、2012年8月にサハリンでJIBSNイベントがおこなれた時、僕は外間守吉与那国町長とお話する機会があった。この時は岩下先生と町長と僕の三人で日本総領事館へ訪問へ行くことになり、時間合わせのためにユジノサハリンスクの駅前のハンバーガーショップでお茶を飲んでた。この時に、外間町長からもう一度台湾へのチャーター便が飛ぶことをうかがった。その時に、やや強引に参加をお願いしたのは僕で、

それは先に述べたように、あのモヤモヤした不思議な空気の正体を、どうしても理解しなかったからで、それにはもう一度同じ経験をするしかないと思ったからだった。それに、関係者諸氏の艱難辛苦の果てに飛び立ったあの2011年のチャーター便が、一体どのように結実してゆくのかも、この目で見届ける必要があったから、という理由もあった。



与那国島ナンタ浜

というわけで、2012年9月19日、僕はふたたび与那国に赴き、花蓮へ向かうチャーター便に乗せてもらうことになった。朝8時の便で千歳を離陸し、羽田・那覇で乗り継いで与那国へ向かう。与那国に着いたのは17時。あいにくの曇り空であり、僕が内心恐れていた猛烈な暑気はなかった。猛暑続きの札幌の方が暑かったくらいである。

空港から宿まではちょっと距離があるのだが、20分ほど待てば島内を循環する無料のコミュニティバスが来るのでそれに乗ればいいと、空港の人が教えてくれた。このバスだと反時計回りに島を四分の三周することになるが、無料でプチ観光ができると思えば、かえってお得感がある。「Dr.コトー診療所」をご覧になった方はご存じかと思うが、与那国島の景観にはそこかしこに飾らない美しさがある。素朴な釣り宿といった風情の民宿に一泊して、翌朝カメラを抱えて島を散策したものの、2011年と同様にやはり天候には恵まれず、いい写真が撮れなかった。（僕の腕ではなく、あくまでも天候に恵まれなかったからである。）

## 2. そして台湾へ（2012年9月20日）

さて、9月20日、いよいよ台湾へ出発する日である。空港に向かう前に、外間町長にお礼のご挨拶をするために与那国町役場に立ち寄った。町長はサハリンで一緒だった僕を覚えていてくれて、気さくにいろいろな話をしてくれた。サハリン土産のコニャックが大好評だったらしく、何とかもう一度手に入れたいとのこと。さすが与那国は泡盛の本場だけあって、ロシアのお酒が合うみたいだ。そういえば、昔サハリンから北海道に来ていたロシア人の友人が、泡盛の古酒をいたく気に入って、札幌ではそればかり呑んでいたのを思い出した。

もちろん、酒の話ばかりでなく、きちんと取材もした。何しろ僕は仕事で出張に来ているのだ。というわけで、以下は外間町長のお話の要約である。

「台湾とは30年間でこれまでに6往復しました。一度は船を使いました。確かに、昨年（2011年）のチャーター便がきっかけで、これで5年ぶりに交流が復活したことは本当に喜ばしいです。今年（2012年）は30周年ということもあり、地域国際交流事業として約400万円の予算がついたので、チャーター便を飛ばすことができました。やはり、予算の確保が非常に難しいのが現状です」



外間守吉与那国町長

空港での出発式

「経済交流は難しいです。与那国は物価が高いので、どうしても割高になる。むかしのはなしですが、一度実証実験を試みたんです。でも、どうしても東京からの輸送コストの方が安くなるし、思わぬところで支障がでました。たとえば、おもちゃの輸入を試みたときに、『赤ちゃんがなめるから』という理由で検疫にひっかかってしまうんです。そんなこんなで、単純に交易といっても、なかなか難しいんですよ」

「やはり与那国の人口1600人というキャパシティがネックになります。圧倒的に需要が乏しく、経済的なギャップを埋めることができないんですね。経済交流を無理に進めようとしても続かないわけです」

「というわけで、これからは観光と人的交流を中心に、人のやりとりで生まれてくるものを大事にしていこうと考えています。今回のシンポジウムでは、教育をテーマにディスカッションを行い、修学旅行やホームステイなどのほか、インターネットを通しての対話を進めたりということを考えています」

「チャーター便はこれからも是非続けたい。だが、自治体がつねに手配をするのは無理です。これからは民間で、ビジネスでおこなっていただきたいと思うのですが、なかなか（手を上げる人が）出てこないんです。是非テーマを出して、今後は民活でと考えていますが、現実問題としてビジネスとしては、利益を上げるのは本当にむづかしい。『私財をなげうってでも』というわけにはいかないでしょうから……」

というわけで、残念ながら2013年度以降のチャーター便の予定はないとのこと。だが、人口1600人の自治体に日台間の国際交流事業を丸投げするという発想にそもそも無理がありはしないか。境界地域を安定させる絶対要素は健全なる善隣関係の形成と維持であり、それは手段ではなく、ボーダーポリティクスの最終目的でもあるはずなのに、そのためにかける予算は日本政府にはないらしい。（北方領土対策には膨大な予算があるにもかかわらず、である。）実にもったいないというか、嘆かわしいことである。くりかえすが、国境地域における善隣関係の形成・維持・発展は、本来的には領土確定と同等以上の重要性を持つ政策目標のはずだ。その根幹をなすべきは国境間での定期的交通手段であるにもかかわらず、その重要性さえ理解できないのが、日本の現実なのだ。——ともあれ、今回は予算が付いているのだから、あまり悪口は言うまい。ただ、えとぴりか号<sup>1</sup>のような船が一隻あれば、今後の日台関係も随分変わってくるだろうとは思う。

予定では台湾から復興航空のチャーター便が与那国に到着し、13時に我々を乗せて離陸するはずであった。空港には三々五々という感じで参加者が集まってきた。思ったよりも若者の姿が目立つのは、今回は交流事業の一環で伝統舞踊を披露するからのようだ。空港玄関前で簡単な出発式があり、各々がチケット類を受け取って搭乗手続きがはじまる。ただ、与那国空港は国際空港ではないので、税関設備がない。前回と同様に仮設ブースをこしらえて税関業務がおこなわれていた。国境の島でありながら空港に税関がないという現実も、やはり指摘しておかなくてはいけない問題点といえるだろう。

台湾へ向かうチャーター便は案の定、少し遅れて与那国へ飛来した。前回もそうだったが、一度石垣島ちかくの防空識別ラインを通らなくてはいけないらしく、直線で往復はできないのだそうだ。（もっとも遅れたのがそのせいかどうかはわからないのだが）



チャーター便と機内

<sup>1</sup> えとぴりか号とは、北方領土との交流事業のためにつくられた新造船（平成23年11月）のこと。



花蓮空港での歓迎セレモニー

記念撮影

原住民センターでの交流

いよいよ乗り込んで、台湾へ向かう。やはり前回（2011年）同様に助六寿司のような機内食が出る。乗っている時間が1時間弱なので、結構慌ただしい食事になるが、結構美味しい。ただ、機内の様子については、あまり書くことがない。短いフライトだし、機内の様子は普通の旅行とあまり大差がないからだ。

というわけで、若干スケジュールが押し気味に花蓮空港に到着する。入国手続きを終えてゲートを出ると、市公所一行と市民一同の大歓迎が待ち受けていた。前回も、「原住民<sup>2</sup>」の歓迎の踊りなどで出迎えてもらったが、今回はそれに加えて中学生のマーチングバンドなど、さらに豪華なイベントが空港で行われた。田市長の歓迎の挨拶に、外間町長のお礼の挨拶など、和気藹々の雰囲気での歓迎式が進み、記念撮影。送迎バスでホテルへ向かう・・・のではなく、「原住民センター」へ。そこで「原住民」による歓迎舞踏コンサートに招待されたのだった。やはり、市長の挨拶に町長の挨拶、そして歓迎コンサート、最後には与那国・花蓮の両市民がステージに集まって輪舞となった。コンサートが終わって玄関ホールを出ると、手作りの、つきたてのお餅がお土産として振る舞われた。

ようやくバスはホテルに向かった。2011年と同じリゾートホテルだった。ここは窓からの眺望がすばらしい。花蓮市街の向こうに中央山脈の鋭鋒がわずかに雲をいだけいて突き出している。海岸沿いの町並みの向こうに、いきなり数千メートル級の山々が壁のように立ちはだかる光景は、日本ではなかなか見受けられない雄大な光景だ。この写真ではうまく伝わらないかもしれない。（余談ながら、富山と立山連峰の関係に少し似ている気がする。）

ホテルで一息ついた後、再びバスに乗り、歓迎レセプションの会場へ向かう。市民体育館が会場で、ここでも盛りだくさんのアトラクションと豪華な料理の数々が待ち受けていた。せっかくなので列挙しよう。

#### 【イベント】

30周年を記念しての友誼式・30周年の歴史に立ち会う・今後30年続く両国姉妹都市の友情

#### 【アトラクション】

楽来楽文化楽団（「時の流れに身を任せ」ほか）・花蓮児童舞踏劇坊による中国獅子舞とバレエ・二胡打楽器合奏による新年楽・南芸大孫晨翔教師等10人による「涙そうそう」「三線の花」・花蓮県国際スポーツダンス協会によるベリーダンス「インドの風」・原住民歌手イサイ ダダオによる「麗しのタロコ」「神秘の溪谷」「花蓮の娘」

#### 【料理】

海の幸のオードブル・伊勢エビのサラダ・フカヒレと白菜のスープ・マンボウのセロリ炒め・エビの湯葉巻き揚げ・ウナギの炊き込みご飯・オイスターのそばろかけ・地鶏料理・野菜の三色あんかけ・魚の姿蒸し・牛蒡とスペアリブのスープ・飲茶とデザート・季節のフルーツ（スイカとザボン）・飲み物

スケジュールでは、パーティーは18時から20時30分となっていたが、実際には1時間以上オーバーして終了した。実のところ、ここまで手厚い接待を受けたことのない僕は、主役でないにもかかわらず相当疲れてしまった。いくら何でも歓迎しすぎだと思うのは、僕だけではなかったらしい。これだけの接待ができるなら、そのお金であと2回くらいはチャーター便が飛ばせるのではないかと思ったほどである。レセプション

<sup>2</sup> 台湾では「原住民」という言葉に差別的なニュアンスはなく、先住少数民族の自称でもあります。ゆえに、本稿ではそのまま使用しています。



歓迎レセプション会場



歓迎レセプションの様子



歓迎レセプションでの交流風景



会場入り口ブースの横断幕

のバックボードのクレジットに「指導単位：外交部・花蓮県政府」とあるのを見て納得した。要するに「お国がかり」での、かつ花蓮県全体をあげての歓迎イベントなのだ。道理で豪華なはずではあるが、ゲストたる与那国の人々の中には、かえって顔を青くしている人も多かった。つまり、自分たちがホストになったときのことを考えたからである。今度、花蓮の人々が与那国に来たときは、与那国側が手厚い歓迎をしなくてはいけないのだ。だが与那国は、外務省はもちろん沖縄県のバックアップさえも期待できそうもない、というのが現状だからだ。そこで、素直さがウリの僕は率直に聞いてみた。

——どうするんですか？

——いやあ、\*\*さんなんかは「その時は借金してでも、やらなくちやいかん」とか言ってたけど、町長は「まあ、自分たちはできることをやればいい」って言ってたよ。

——…ですよね。

ただ、「歓迎のされすぎでは？」「どうして一体ここまで？」…というのが与那国側の偽らざる感想であったろう。そして、その疑問は翌日にはますます大きくなるのである。

### 3. 歓迎、観光、また歓迎（2012年9月21日）

翌朝、リゾートホテルでの朝食の後、9月21日の最初のイベントは「南方文庫」「将軍府」オープニングセレモニーであった。花蓮には日本植民地時代の花蓮憲兵隊官舎群という歴史的建造物が残っている。それらの保存修復を図るとともに、その司令官官舎を利用して、日本語文献を一般公開する小さな文化センター「南方文庫」が設けられることになった。そのオープニングセレモニーが与那国訪問団の来訪に合わせて実施されたのである。

これは将来的に台湾と日本の文化交流の拠点になれば…という願いのこもった施設とセレモニーであったが、それ以上に花蓮市側の心配りは感動的であった。9月下旬とはいえ、まだ汗ばむ時節だったから、会場にケータリングのドリンクサービスがあったのは非常にありがたかった。さらに、お土産物として用意され



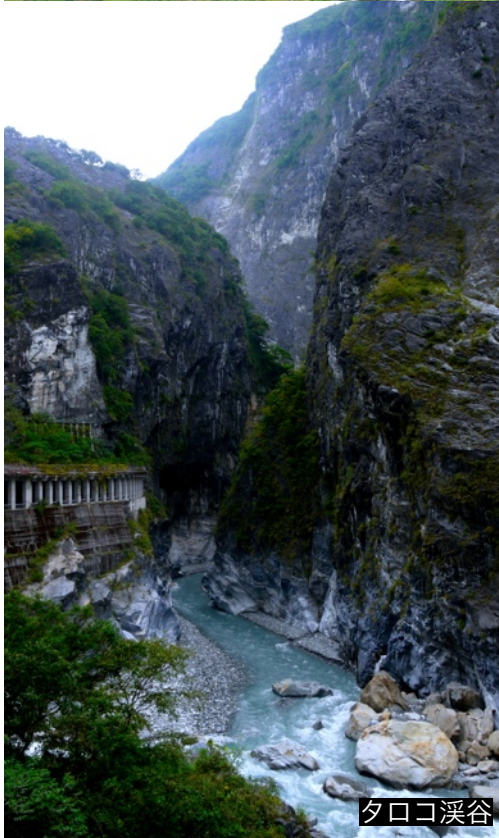
南方文庫オープニングセレモニー



旧花蓮憲兵隊官舎



松園別館



タロコ渓谷



大理石工場



宝石特売場

た記念のトートバッグも秀逸で、インスタントプリンティングで自分の好きな模様をつけられるように工夫されていた。そして、このセレモニーにも当然のように花蓮市長が同席し、みたび挨拶に立ち、ホスト側の中心的役割を果たしていた。さらに言えば、メインストリートの街頭には、花蓮市与那国町友好提携30周年のシンボルマークの旗が数多くはためいており、これもまた、花蓮市側がいかにかこの交流事業を重要視しているかの証左であると思われた。事前の予想を大きく凌駕する歓待ぶりに、南方文庫を見学中に町長がこっそりと僕に耳打ちしてきた。

——台湾の人たちは、本当に親日的なんだねえ。

——そうですね。

確かに、親日ムードを前面に押し出した歓待ぶりであり、2011年の歓迎ムードをすら大きく上回るものだった。台湾は蒋介石の時代より日本統治時代の方がずっとよかった（マシだった）から、彼らは親日的なのだ、というのは某中国研究者の弁だが、真偽の程は定かではない。

このセレモニーの後、一行は花蓮観光に向かった。すっかり説明を忘れていたが、花蓮市は台湾の北東部にある人口11万人ほどの港湾都市で、台湾原住民が多いことや天然の大理石・台湾翡翠などの宝石が産出されることで知られている。

最初に訪れた松園別館は、1943年に建てられた旧日本軍の将校用招待所だったところで、いまは市の景観公園になっている。2011年にもここを訪れ、その時は改装中で内部の観覧ができなかったのだが、今回は内部もゆっくりと観ることができた。

次に向かったのが、風光明媚な太魯閣(タロコ)渓谷。バスガイドさんは北海道の層雲峡を引き合いに出して、「あんなものより全然スゴいですよ、タロコは！」と力説していたので、愛郷心の強い僕はちょっとだけムツとしていたが、大理石のために乳白色をした溪流と、高所恐怖症にはオススメできない絶壁の連なる風景は確かにスゴかった。まあ、こういう文字通りの絶景は、写真ではなかなか伝わりにくいのでレポーター泣かせなのだが。

さらに昼食後は花蓮の特産品である大理石の加工工場を見学する。ここは世界中から石材を調達してグローバルなニーズに対応している、地味ながら活気のある工場であった。だが、その真骨頂は工場に併設された宝石の特売場であったろう。宝石に関する蘊蓄を散々聞かされ、奢侈心を臨界点まで高められたあとで、まばゆいばかりの宝石のショーケースに誘導された訪問団（特に女性陣）は、給食直前の欠食児童のような風情で翡翠やら瑪瑙やらに群がっていった。僕はといえば、中国人の商売上手っぷりにひたすらに感動を覚えていた。

その後はホテルに返ってシンポジウムがおこなわれた。僕は急遽参加を表明した関係から、このシンポジウムに参加すること

はできなかったが、何しろ仕事で出張しているので、その内容を把握すべく努力した。参加した八重山毎日新聞の松田良孝記者のお話では、花蓮側は「特に観光を強化することを希望する」とともに「経済の発展が両市町の文化や観光の強化につながる」と観光交流への強い意欲を示したという。与那国外間町長は「利害が絡まないため、教育プログラムのルール」をつくりたいことを述べた。また、松田記者には与那国から参加した若者たちの好奇心の強さが印象的だったとのことだった。

シンポジウムの後に行われた21日の記念式典とパーティは、宿泊先の花蓮パークビューホテル2階で行われた。双方で感謝状を授与し、友好姉妹都市条約に調印するなど姉妹都市提携記念にふさわしいセレモニーの後で、与那国側の伝統舞踊のほか、先日の原住民歌手イサイや台湾の某人気歌手の歌唱のほか、女子高生グループのストリートパフォーマンスや、川劇の變面（面の早変わり）で有名な雷恩氏のステージなど、前日以上に多彩な出し物が繰り広げられた。

この時の料理も非常に豪勢であった。「与那国町・花蓮市締結姉妹市30周年『教育・文化及観光交流検討会』30周年記念式典及慶祝晩宴活動」と書かれたメニューは、前菜盛り合わせ・スルメイカのバター炒め・塩味骨抜き牛肉・シェフ特製盛り合わせ・乾隆佛跳牆・葱入り蟹肉の蒸し・魚姿の蒸し料理・蜂蜜漬けハムのパン包み・豆苗とメンマの炒め・セロリと豚肉入りスープ・デザート・季節のフルーツという全12品目で構成されていた。2011年のパーティーでは梅干しを入れた紹興酒があって、僕は少々深酔いしてしまうほどあれが好きだったのだが、今回はその代わりに「ジョニ黒」が並んでいた。間違いなくグレードが一つ高い宴席だと言えるわけではある。だが、正直言えば紹興酒にありつけず、少々残念ではあった。

とはいえ、何よりも驚いたのはメニューの中に「乾隆佛跳牆」があったことだった。ファッチューションといえば、あの「美味しんぼ」でお馴染みの、山岡と栗田の結婚披露宴に出てくるほどの究極の超高級スープである。自分の一生で本当に食す機会が来ようとはついぞ思っていたなかったくらいだ。実際の佛跳牆は、一口食べて陶然となるような美味ではないものの、しみじみとした「滋味」という表現がピッタリの旨さであり、おそろしく後を引くというか、かっぱえびせんの3倍くらい「やめられない止まらない」気分になるスープであった。この一品だけで、花蓮側の本気度が測れようというものだ。

花蓮側のもてなしが相当「本気」であったことはもはや言うまでもないのだが、やや率直に言えば、双方が郷土の舞踊を披露するというのは、30周年という時間の長さに対して、彼らの交流がほとんど進んでいなかったことを如実に物語るものではなかったか。それは悪いことではもちろんないのだが、お互いに固有の文化をパフォーマンスとして披露するというのは、交流初期にすませておくべきもので、言ってみれば、交流レベル2とか3という段階でのイベントである。30年経ってもまだそのレベルなのかという（いささか意地悪な）感想とは裏腹に、双方がこの交流にかける思いの深さも実感させる一夜であった。

少々不謹慎なたとえをもちだすと、与那国と花蓮の交流は「おくてだが相思相愛のカップル」のようだった。



記念式典での感謝状授与



交流祝賀会



与那国の棒踊



雷恩氏の變面



高校生のパフォーマンス



た。つまり、久しぶりにデートに出かけ、思い切って手をつないではみたものの、そこから先はどうしたらいいかわからない——彼らの関係には、傍から見てそんなもどかしさがつきまっていた。

それにしても、花蓮そして台湾は、与那国にいったい何を期待しているのだろう。その疑問をますます深くした佛跳牆とパーティーであった。

#### 4. 旅の終わりとその後の考察（2012年9月22日～）

紙幅の都合もあるので、あとは手短かにまとめよう。翌22日から訪問団は2手に分かれ、台北と高雄を視察した。僕は町長たちと一緒に高雄へ向かうグループであった。花蓮から高雄へは飛行機。でかい山々を越えるので、結構高度を上げるのでビックリした。高雄の人口は台湾で第二位の270万人。アジアでも有数の規模を持つ港湾都市だが、今回の視察では時間の都合もあり、蓮池潭公園などの景勝地と、夜市で有名な六合二路を視察できた程度であった。それでも、台湾のもつ南国情緒や、高雄の夜市の喧噪や、あふれる生活の匂いなどは十分に堪能することができた。

翌朝早くにホテルを出発し、台湾新幹線で西海岸を北上し台北へ向かう。そして、訪問団はそのまま空港へ向かい、空路で花蓮を経由して与那国へと戻っていた。僕は飛行機の都合でひとり台北に残り、若干の公務をすませ、仁川経由で札幌に戻ったのである。

というわけで、二度目の与那国～台湾横断は幕を閉じたわけであるが、「台湾が与那国に求めたもの」が何だったのかは疑問のまま残った。こういっては何だが、与那国と積極的に交流しても、花蓮や台湾にはさほどの利益にならないことは明らかだ。それを親日的というだけで片付けるのも少々無理がある。

国際的な交流＝海を越えたご近所づきあいというのは結構難しい。1998年に北海道とサハリン州が友好経済協力提携を結んだとき、関係者からは「結婚したとたんにお互いに協議離婚を考えている」という声が密かに聞かれたものだ。要するに互いをダシにして自らが利益をえようという意識が強すぎるからなのだが、台湾と与那国の「おくてなカップル」的關係とはその対極にあるように思える。あるいは台湾は、あくまでも与那国の向こうの沖縄と日本を見ているからだろうか。だが、日台の経済交流は与那国とは無関係に進んでいる。むしろ経済という意味では与那国を経由しない方がよほどうまくいくことも、30年間ですでに実証済みのことである。

結局のところ、彼らはやや損得を度外視しても、与那国との親交を深めたいのだとしか思えない。だが、それはなぜなのか。

台湾（特に北部）の人々にとって、与那国がどんな意味を持つのかといえば、それは「一番近い日本領」である。案外それが正解なのかもしれない。つまり、こういうことだ。

「東に150キロ行けば、日本領与那国島がある」

「まさかの時には、我々の逃げ道はそこしかない」

「与那国にはいざという時に、助けてくれる友人であって欲しい」

「だから、与那国の人たちとは仲良くなっておきたい。それはゼニカネの問題ではない」



バスの車窓から高雄市街



蓮池潭公園の眺望



まさかの時とは、言うまでもなく、中国本土から台湾への侵攻があった場合のことである。確かにそれは、今日明日に起きるような事態ではないだろう。だが、明後日の国際情勢においても、それが絶対に起こらないと断言できる人はいない。将来的に、急激な発展を遂げる中国経済が成長限界を迎えた時、あるいはドラスティックな政治体制の転換が起きた時、在日米軍を中心とする東アジアの軍事バランスが何らかの事情で大きく崩れた時——それでも台湾は現在のような半独立状態を維持できるだろうか。そもそも中国と台湾の関係が「正常な」ものとは言えない以上、まるで震災前の原発推進運動のように「大丈夫！台湾は100%絶対安全です」などと誰が断言できようか。

とまれ、ここで言いたいのは、たとえば国際政治経済の表舞台に立つ人々が、グローバルレベルで東アジアの将来的展望をどう考えているのかという話ではない。その結果に翻弄されるしかない台湾の人々が、ローカルレベルでどんな事態をおそれ、何に備えるべきかという話だ。そう考えた時、台湾の人々が「中国の侵略はありえない」などと高をくくってはられないこと、まさかの時の備えとして、台北や花蓮の人々にとって「逃げ場」は与那国にしかないことは自明の理だ。現実的に与那国が台湾のセーフハウスとしてどの程度有効なのかはわからない。だが、この場合、避難の成功率が距離に反比例することは確実であり、（もちろん長駆してフィリピン・沖縄本島・ハワイなども考えられるが、時間がかかるほど途中で捕捉される可能性が高くなる。）ゆえに選択肢が極端に少ないことも確かだ。

そういう洞察をふまえると、与那国と台湾の友好交流が持つ意味は随分と変わってくる。そして、それが公然と口にできない類の要望であることも。さらに、それは与那国側が今後の交流で密かに、だが絶対に検討しておかなくてはならない課題であることも見えてくるだろう。

## おわりに：台湾が与那国に求めるもの

——本当に「いざ」という時、与那国はどうするべきなのか。それまでに何をすべきか。

だが、ちょっと待ってほしい。もしこれが本当に「台湾が与那国に求めるもの」の答えであれば、それは与那国島民1600人が単独で背負うべき課題だろうか。もちろん、答えは否である。率直に言って、西の国境と称するのさえはばかれるのが現在の与那国だ。そもそも交通事情も劣悪で、（空港に税関すらなく）通常の入国管理体制も不十分な与那国に、これ以上何ができようか。しかしながら、これまでの経験に照らす限り、こういう現状に対して現今の政府や外務省がまともに対応する（できる）とは考えにくい。過去には某国の王族がヨットで周遊中、台風を避けるために与那国へ緊急避難を要請したことがあり、その入国手続を与那国町役場に代行させようとしたことがあったという。何気なくこれを受諾しようとした町職員を町長は一喝してこれを拒否し、自治体に入国管理を代行させようとした当局の姿勢を批判したそうだ。これは与那国をめぐる国境管理の杜撰さを如実に示すエピソードだ。

結局、僕がボーダーポリティクスの不在を嘆く理由はここにある。確かに台湾政府とこの種の方策を模索することは、中国共産党政府との手前、表立っては難しいという事情もわかる。だが、それ以前に、日本側がこうした現状をどの程度理解しているのかについても、僕はかなり深刻に疑問をもっている。

まったくもって、国家の健康は国境にあらわれる。実際この国は、この程度の不測不備すら満足に是正もできないのである。

確かに与那国も台湾も、今は平和である。だが平和というものは天与の権利ではないし、自動的永久的に享受できるものでもない。平和とは不断の努力と誠意、相互理解と適切なポリティクス、さらに言えばそれ相応のコストとパワーによって維持されるべきものである。正直「平和呆け」という言葉は嫌いなのだが、与那国を日本が放置している現状をみるかぎり、日本はこの地域での平和を維持するために何をしているといえるのか。パワーといえば、与那国はいま自衛隊誘致の是非で島の世論が割れている。この件について、僕はコメントする資格を持たないし、するつもりもない。でも、先に述べたように、軍事力だけで与那国の平和をうんぬんするのは大きな間違いで、その是非とは別に、軍事力に左右されない安定要因をつくること、すなわち周辺地域との友好的つながりを強める努力もまた不可欠なのだということは述べておきたい。

その意味では、台湾と花蓮が与那国との交流で見せた誠意と努力を、僕たちは見習うべきだ。もちろん、それは借金してでも台湾側を熱烈接待せよという意味ではない。今回の事業が与那国に事実上単独ミッションを強いたことを猛省した上で、地方とか国という枠組みにとらわれない「善隣関係の維持増進と国境管理体制」を再考すべきだということだ。その中では必然的に「いざ」という時に与那国はどうすべきかという課題が浮き彫りになるだろう。

とまれ、台湾が与那国に求めるものとは何か。その答えが「今後の平和と友好について、一緒にきちんと考えましょう」だということは、ほとんど疑う余地のない事実だ。それを与那国島民1600人の問題として丸投げする愚行をやめ、改めて日本全体の境界政策の一環として粛々と進めるべきだというのが、本稿のささやかなる結論である。

**\*なお、エッセイの内容は、スラブ研究センターを始め、いかなる機関を代表するものではなく、筆者個人の見解です。**